

地域研究における 三つの「たいしよう」

浅羽 祐樹
〔比較政治学・韓国政治〕

●「対称」化するアジア

一九六五年に日韓両国が国交を正常化してから今年六月で五〇年が経った。その記念すべき年に、外務省のホームページの日韓関係に関する記述から、「自由と民主主義、市場経済等の基本的価値を共有する」という文言が削除された。外交青書に初めて「基本的価値」「の」共有」が盛り込まれたのは二〇〇四年で、「民主主義、市場経済」が例示されたが、二〇〇七年に「自由、民主主義、基本的人権」へと例示の仕方が変わり、二〇一四年まで踏襲された。ところが、今年から「最も重要な隣国」とだけ形容されている。特に「自由」の共有に対する拒否感が官邸で強く、その意向が政府全体で貫徹されたという。

一〇年前には、現代韓国朝鮮研究のパイオニアが『体制共有』

から『意識共有』へ（小此木政夫編『韓国における市民意識の動態』慶應義塾大学出版会、二〇〇五年）という日韓関係の変容に注目したことに鑑みると、隔世の感がある。日韓四〇周年の頃は、確かに、自由民主主義体制や米国の同盟を基軸とする外交安保体制を共有しているだけでなく、「韓流」／「日流」ブームのなかで、民意も「対等感」がベースになりつつあった。長らく「日本優位」だった関係が対称的になったのは画期的なことだった。

ところが、近年、互いの政治体制に対する違和感だけでなく、外交安保政策にも齟齬が広がっていることが「日韓共同世論調査」（言論NPO・東アジア研究院実施）によって明らかになっている。日韓両国民の過半数はそれぞれ相手に対して「民族主義」「軍国主

義」と認識している反面、「民主主義」や「自由主義」という回答は最大でも二割ほどにすぎない。

また、朴槿恵政権では「韓米日」の安保連携より「韓米中」が重視されるなかで、日本（五八・一％）は北朝鮮（八三・四％）に次いで軍事的脅威として認識されている。つまり、体制をめぐる意識が離反しているというわけである。このように、地域研究では、対象国と日本との関係が大きく様変わりするなかで、にわかに対称的になったアジアの場合は特に、理解の仕方が追いついていない場合も少なくない。

●《他者》として「対象」化
「嫌韓」「反中」本はそうした限界の表れである。それ自体、日本研究の対象として興味深い。

たとえば、旅客船セウォル号の

沈没事故について、「パリパリリ（はやくはやく）文化」や「ケンチャナヨ（いいかげん）精神」のある意味当然の結果である、と解説するベテランのウォッチャーがいる（室谷克実『デイス・イズ・コリア 韓国船沈没考』産経新聞出版、二〇一四年）。何か事が起きるたびに、いつも「韓国（人）が〜」なのは韓国（人）だからだ」という文化論や国民性を持ち出すのが、何にでも当てはまる説明は、実は、何も説明できない。これでは、なぜ海難事故だったのか、なぜセウォル号だったのか、の理由が分からない。「いつもと同じ不可解な韓国（デイス・イズ・コリア）」や「OINK（Only IN Korea）」にみえるのは、ピントのずれた「レンズ」をかけているからである。

レンズを替えて、制度的な側面、つまり業界団体や規制官庁、さらには大統領をめぐるルール、そのなかでプレーヤーそれぞれにとつてのインセンティブ構造に注目すると、本来規制すべき官庁が業界団体に取り込まれてしまった「規制の罫」の典型としてみえてくる。そうすると、日本の原発事故との

類似点にも気づくはずだ。

手持ちの尺度では「珍プレー」にみえる相手の行動を《他者》として対象化し、好悪や快不快のレベルで反応するのではなく、尺度そのものを自ら不断に見直していくことが問われている。そうすることで、その世界のそのゲームのそのルールに応じたよくあるプレーの「傾向」として分析できるようになり、さらには、適切な「対策」を講じることができるようである。

●「対照」させるという方法

尺度を替える、スケール・シフトするためには外国語の学習が欠かせない。地域研究のアルファにしてオメガは、対象国の「ことば」に馴染み、文脈をこえて「翻訳・通訳」することである。

日本語話者にとって韓国語の場合、語順が似ていて多くの漢字語を共有しているため、とっつきやすく、ある程度までは誰でもできるようになる。私自身、「アンニョンハセヨ」と「カムサハムニダ」だけを覚えてソウル大学国際大学院に進学したが、漢字語が七割を占める新聞は半年後には読めるようになり、すっかり「分かつ

た」気になっていた。実際は、「韓日」「頂上」会談を「日韓」「首脳」会談」に置き換えるくらいでは機械翻訳と差がつかない。

外交の場では、単語一つひとつのニュアンスが死活的になる。たとえば、慰安婦問題で朴大統領が要求する「忍耐力がある措置」の場合、そもそも「真正性」「真性情」という二つの漢字語が考えられるし、いずれにせよそのままだと意味が通じない。「誠意ある措置」と訳出されることが多いが、これだと「金銭要求」と短絡されやすい。「言動の一貫性」と意識できないと交渉に臨めない。

多くを共有している漢字語でさえ同音異義語が少なくない。こうした異同を「一大事」として受けとめてはじめて、どんぐりの背比べで足踏み状態になりがちな「中級」から一歩抜け出すことができると、**前田真彦『前田式韓国語上級表現ノート』**(参考文献①)は、日本語と韓国語が似ているように異なっていて、異なっているように似ている分、日本語話者が韓国語を学習するうえで直面しやすい悩みと解決策をコンパクトに整理している。各地で孤軍奮闘している中級学習者をつなぐ『韓国語学

習ジャーナル hana』(隔月刊)もオススメだ。

一生涯をかけて韓国語の研究と教育に取り組んでいる野間秀樹によると、日本語話者にとって韓国語を学ぶというのは、照らし合わせて日本語のありようを振り返るということでもあるという。さらに、外国語に限らず、他の誰かのことを学ぶということは、異なりながら共に在るV、自らへ別様に在りうるVということにオープンであるということだという。

『**韓国語をいかに学ぶか**』(参考文献②)は、徹頭徹尾、日本語話者の学習者のために書かれているが、『**韓国語を学ぶ方法**』(韓国語の「法」だけでなく「韓国語という方法」という研究方法、いや世界観に基づいている。入門書の第一課で日本語話者が相手の言っていることが分からず「네?」と訳き返すのは、発話の場では最初から欠かせないからであるし、その人の名前が「**토쿠가와**」さんなのも、発音の仕組みを段階ごとに自然に習得させるためだという。

いま、切実なのは、このように相手と対照させて自らを省みるという姿勢である。ダメなところだけこれみよがしにdisり合う必

要はまったくなく、失敗学の事例として淡々と分析すればいい。それよりも、互いにいいところをベッチマーキングし、教え合い、共に学びたい。**春木育美・薛東勲編『韓国の少子高齢化と格差社会』**(参考文献③)は、まさにそうした「韓国という方法」「日本という方法」で、日韓がそれぞれの仕方分ち合っている課題について共に取り組むアプローチを示している。

韓国研究や地域研究に限らず、新しい「ことば」を学び続けることは未来に向けた共生の条件であり、希望である。

(あさば ゆうき/新潟県立大学大学院国際地域学専攻教授)

《参考文献》

①前田真彦『前田式韓国語上級表現ノート(1)(2)』(明石書店、二〇一五年)。

②野間秀樹『韓国語をいかに学ぶか——日本語話者のために』(平凡社新書、二〇一四年)。

③春木育美・薛東勲編『韓国の少子高齢化と格差社会——日韓比較の視座から』(慶應義塾大学出版会、二〇一一年)。